

# 尖石遺跡

— 保存整備事業に係る試掘調査報告書 —

1993

茅野市教育委員会

# 尖石遺跡

— 保存整備事業に係る試掘調査報告書 —

1993

茅野市教育委員会

## 序 文

長野県の中央に位置する茅野市は古くから人びとが活躍した舞台であり、市内には300を越える遺跡が発見されています。その多くは縄文時代のものですが、なかでも中期と呼ばれる時期の遺跡が多く、その代表的な遺跡が国特別史跡として著名な尖石遺跡です。

尖石遺跡は明治20年代に学会に紹介されて以来、多くの研究者に注目され、調査研究がなされてきました。特に宮坂英式先生の永年にわたる歓喜的な発掘調査により、日本で最初に縄文時代集落の姿が明らかにされました。これはその後の集落研究の原点となる画期的な仕事であります。こうした宮坂先生の御努力により尖石遺跡は学術上の価値が特に高いという理由で、昭和17年に国の史跡となり、昭和27年には国の特別史跡に指定されました。以来、尖石遺跡は今日まで地元をはじめ多くの人びとの善意と協力によって大切に保存されてきました。

茅野市はこのすばらしい郷土の文化遺産を保存し、後世に受け継ぐべく、昭和62年度から国、県当局のご援助をいただき、尖石遺跡の公有地化を行ってきました。そして平成2年度からは保存整備事業に着手し、この事業と並行して尖石整備委員会を設置し、史跡公開化に向けての準備を着々と進めております。

平成2年度より行っている試掘調査は、尖石遺跡の整備計画を作成していく上での基礎的な調査として実施されたものであり、大きな成果をあげております。3年目になる今年度の調査では、集落の東側の限界を推定する等の成果を得ることができました。

最後に、事業の実施にあたって、御指導いただいた文化庁、長野県教育委員会をはじめ、調査に参加された関係者のみなさまに対し、深甚なる感謝を申し上げます。

平成5年3月

茅野市教育長  
両角 昭二

## 例　　言

1. 本書は、特別史跡尖石遺跡保存整備事業に係る試掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、国庫及び県費の補助を受け、茅野市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査は、平成4年7月13日から9月28日まで行った。
4. 発掘現場における記録及び遺物整理は、調査員 小林深志、小林健治、調査補助員 武居八千代が行った。
5. 出土品、諸記録は茅野市文化財調査室で保管している。
6. 本書の原稿執筆は、小林深志と小林健治が協議し、小林健治が行った。この他、調査及び整理にあたって、茅野市文化財調査室の職員に、指導・助言を得た。
7. 茅野市文化財調査室  
室長 水田光弘  
係長 鶴鉢幸雄  
主任 両角一夫  
調査員 守矢昌文、小林深志、功刀司、小池岳史、白瀬一郎、小林健治  
主事補 大月三千代  
嘱託 山崎貴弘
8. 発掘参加者  
武居八千代、宮坂和茂、帶川清司、小平久平、小平千恵子、武田けき子、牛山みつ江、田中洋二郎、小平やえ、小平つぎ
9. 基本層序における層界に関する記述は「土壤調査ハンドブック」(ペドロジスト懇談会編) P 29の方法に従っておこなった。次にそれを示す。

・層界の明瞭度

明瞭度	層界の幅
両然	1cm以内
明瞭	1~3cm
判然	3~5cm
漸変	5cm以上

・層界の形状

明瞭度	層界の幅
平坦	ほとんど平面
波状	凹凸の深さが幅より小
不規則	凹凸の深さが幅より大
付連続	層位が不連続

## 第Ⅰ章 調査の目的

平成2年度の調査は、特別史跡尖石遺跡指定地の西側境界付近での遺構の分布状態を調査し、遺跡の西側を明らかにすることを目的とした。また、かつての調査において、第18号住居址が尖石遺跡の西端であるという宮坂英式氏の見解の裏付けを調査の課題とした。その結果、所在のはっきりしていなかった第18号住居址の位置を明確にし、宮坂英式氏の指摘したとおり、第18号住居址より西側に遺構は検出されず、遺跡の西端を明らかにした。

平成3年度の調査では、ひきつづき遺跡の北西の限界を知ることを目的として行った。この地区は過去において調査したことのない箇所であり、尖石遺跡の集落構造をみるうえにも重要な地域である。また、遺跡の広がりが指定範囲内で終わっているのかどうかを確認することも目的の一つであった。調査の結果、住居址2軒、土坑4基を発見し、尖石遺跡の北西端をほぼ明らかにした。北西区で出土した上器のほとんどは、中期の初頭から中葉にかけての時期のもので、南東区に分布の多い中期後半の土器はほとんど出土していない。このことから中期の初頭から中葉にかけて、遺跡の全体に大きな集落をつくっていたものが、後半になると、南東区に集落の中心が移り、北西区は集落から外れることになる状況が明らかとなった。また遺物の出土状態から、発見された2軒の住居址が尖石遺跡の北西隅にあたると考えられた。

今年度の調査は、遺跡の東端を見極めること（調査区III区）、また集落の広場の可能性を考えられる地域（調査区I・IV区）の遺構の分布状態及び地形を調査することを目的として行った。

## 第Ⅱ章 歴史的環境

今回発掘を行ったIII区およびI・IV区の周辺地域の歴史的環境について述べる。

III区調査地点の西側、グリッドではII×J KLMN15、III区 I J KLMN 1・2・3に相当する地域は、昭和16年に宮坂英式氏等により10本のトレンチが東西に発掘され、合計39箇所の住居址の存在が推定された場所である。このトレンチの東側先端にも住居址の存在が推定されている。このトレンチ東側先端が今回のIII区調査地点付近まで及んでいることは確実である。翌17年には竪穴群・列石群・独立埋甕が発見されている。またJ 3～N 3より以南では昭和15年から17年にかけて複数の住居址が発掘された。時期の確認されているものは全て中期後半のものである。

I区の周辺、グリッドではIV区K L M 1・2・3に相当する地域は、昭和5年に小平幸衛氏等により合計11基の炉址が発掘されている。各炉址にはI～XIまでの番号がつけられている（第1図参照）。

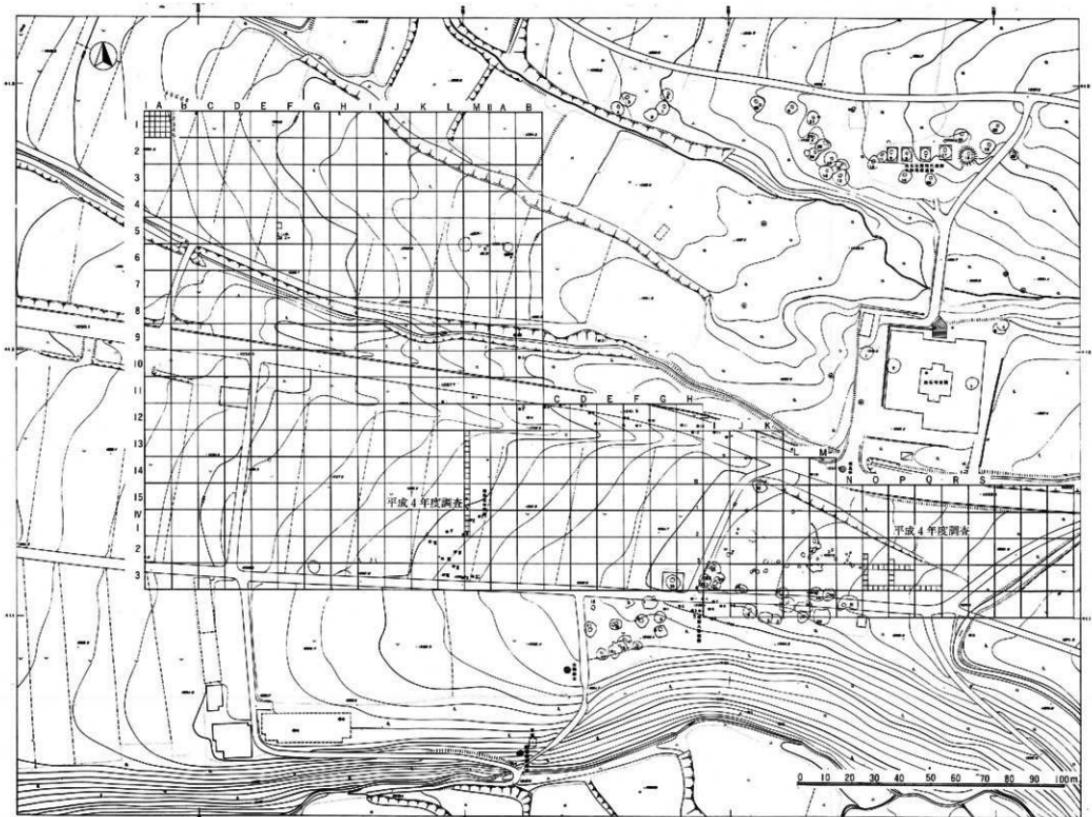
## 第III章 調査の方法と経過

### 第1節 調査の方法

平成2年度の調査を行う際に、尖石遺跡全体を大きく4つに分け、北西隅をI区とし、時計回りにII区・III区・IV区と区画の名称をつけた。その各区画ごとに遺跡範囲の全体を覆うように東西南北にあわせて大きく10m四方の大きな正方形のグリッド（大グリッド）で区切り、x軸を大文字のアルファベット、y軸を数字で呼称している。さらにその大グリッドを2m四方の小さなグリッド（小グリッド）としてx軸を小文字のアルファベット、y軸を数字で表し、A 1 a 1のように小グリッドの一つ一つに名前を付ける作業を行っている。今回調査の対象となったのは、遺跡の東にあたるIII区とその西に隣接するI区からIV区の一部である。I区からIV区のグリッドは、従来集落の広場であると考えられた地域に、直線上に南北に設けたものである。掘り下げにあたっては、住居址の検出が行えるよう、2mの小グリッドを1つおきに掘り下げていく方法を取った。遺構の確認は、第4層（第IV章第1節参照）上面までとし、必要に応じてそれ以下を掘り下げるのこととした。また、遺跡全体の地形をみるために計画的に東西方向及び南北方向に一列に掘り下げて行くこととし、必要に応じて新しく調査地点を設けることとした。

### 第2節 調査の経過

- 7月13日（月）I区とIV区のグリッド杭の残存状態を確認。
- 8月21日（金）III区に基準杭を設置。
- 8月27日（木）III区より掘り下げ開始。
- 8月28日（金）基本層序の確認。
- 8月29日（土）III区O3a 1・3の第4層上面から礫出土。
- 9月1日（火）III区O3a 2の第4層上面から礫出土。
- 9月2日（水）I、IV区の発掘グリッドとベンチマークを設置。
- 9月3日（木）I、IV区の掘り下げ開始。北側より掘り進める。
- 9月7日（月）I、IV区の掘り下げ続行。III区O3a 4を掘り下げ開始。
- 9月8日（火）I区M15a 5より住居址と思われる遺構を検出。
- 9月9日（水）I区M15a 3より土坑と思われる遺構を検出。
- 9月10日（木）IV区M1a 2・3・4にかけて住居址と思われる遺構を検出。
- 9月22日（火）実測、記録作業がほぼ終了。
- 9月28日（月）埋め戻し全て終了。発掘機材を搬出し、全調査を終了する。



第1図 道路グリッド図 (1/1,500)

## 第IV章 遺跡の層序と地形

### 第1節 遺跡の基本層序

平成2年度の調査において、尖石遺跡の基本層序が下記の様に述べられている。

第1層 黒色土（耕作土）

第2層 漆黒土

第3層 黑褐色土

第4層 黄褐色土（ローム漸移層）

今年度の調査においては、今後の尖石遺跡調査における各層の同定を容易にするため、「新版標準土色帳」による土色の判別を行い、それに従って呼称を改変した。結果は下記の通りである。

第1層 黒色土→暗褐色土（10YR3/3）

第2層 漆黒土→黒褐色土（10YR2/2）

第3層 黑褐色土→黒褐色土（10YR2/3）

第4層 黄褐色土→暗褐色土（10YR3/4）…ローム漸移層であるため、黒味、黄味の強い部分の差は大きい。上色の判別に際しては両者が均等に混合している部分の中間的な土色を採取して行った。

また今回の調査において、III区で第1層下に新たな層が検出された。その層下にある第2層または第3層との層界は何れも「画然」とし形状は「平坦」であり、擾乱層であると思われる。そのため第1層をa、bの2層に分割し、昨年度までの第1層を第1a層、新たな層を第1b層として、第2層以下をプライマリーな層として位置づけた。

上記を加味した結果が下記の層序である。

第1a層 黒色土→暗褐色土（10YR3/3）

第1b層 新しい層→褐色土（10YR4/4）

第2層 漆黒土→黒褐色土（10YR2/2）

第3層 黑褐色土→黒褐色土（10YR2/3）

第4層 黄褐色土→暗褐色土（10YR3/4）

1. 第1a層 暗褐色土（10YR3/3） 地表面下10cmほどまでは粒子は粗く、徐々に粒子が細かくなる。締まりは全体になく、粘性もない。1mm以下のローム粒子を稀に含み、ロームブロックの混入はない。1mm程度の炭化物・礫を稀に含む。第1b層、第2層、第3層との層界はいずれも「画然」とし形状は「平坦」である。

2. 第1b層 褐色土（10YR4/4） 締まり、粘性ともにあまりない。ローム粒子を多量に含む細かい粒子の褐色土である。礫、1~3mm程度のロームブロックを多量に包含する部分が多くあ

る。第2層、第3層との層界はいずれも「画然」とし形状は「平坦」である。

3. 第2層 黒褐色土 (10YR2/2) 粒子は細かい。縮まりはあるか粘性はない。1mm以下のローム粒子を稀に含む。第3層との層界は「画然」とし形状は「波状」を呈している。

4. 第3層 黑褐色土 (10YR2/3) 粒子は細かく、縮まりはあるが、粘性はない。1mm以下のローム粒子を稀に含むが、ロームブロック、炭化物、礫はみられない。第4層との層界は「漸変」<sup>※3</sup>し形状は「不規則」である。

5. 第4層 暗褐色土 (10YR3/4) 粒子は細かく、縮まりはあるが、粘性はない。1mm以下のローム粒子を多量に含み、3mmほどのロームブロックも少量含む。稀に3mm大の炭化物粒子を含むが、礫の混入はない。

註 <sup>※4</sup>上色の判別方法 水分を充分に含ませ壁面より水膜が消えた後、壁面を擦削し新鮮な面を露出させる。少量の土塊を黒い台紙の上に採取し、明るい日陰にて土色模の表色と比べ判別。

( ) 内の数値は『新版標準土色帳』による土色番号を示す。

<sup>※5</sup> 「 」内の層界表現については例言9を参照

## 第2節 各区の層序と地形

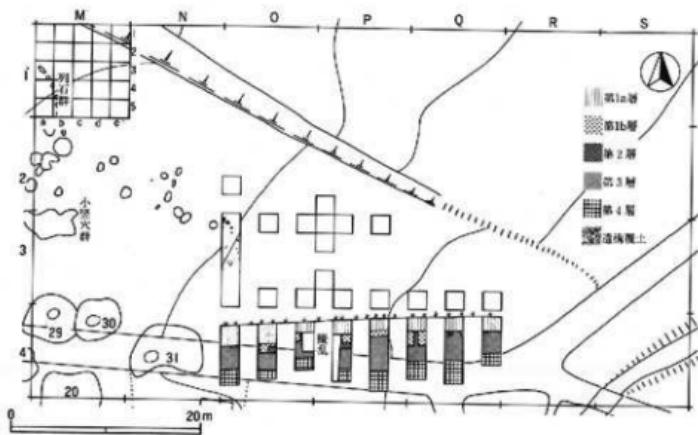
### 1. III区

III区の発掘グリッドにおける層序は前述の層序が安定的に観察される。一部擾乱の及んでいる部分を除いて、第1a層、第3層、第4層は全てのグリッドにわたって安定的に検出される。今回、III区ではじめて観察された第1b層は、平均10cm程度の薄い層であるが、層界ははっきりしており、殆どのグリッド壁面にみられた。第2層はグリッド壁面によって観察されるところとされないところがあるが、これは第2層と第3層との層界がはっきりしない為、検出が容易でないことも原因していると思われる。第2層は第3層上にみられる黒味のより強い部分を指した平均10cm未満の薄い層である。III区の地形は南北には水平を保ち、東側に緩やかに上の傾斜をしている。各層は地形とはば平行に堆積しているので、III区は原地形を保っていると考えられる。

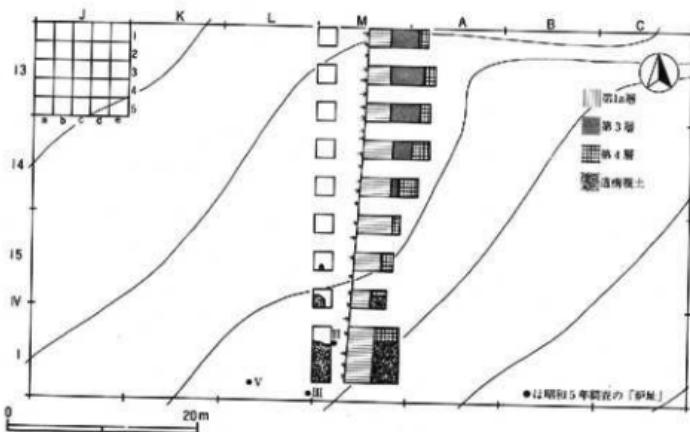
### 2. I・IV区

I・IV区に設けた南北一列の発掘グリッドのうち、南半部のグリッド (I)×M15a 1~IV区M1a 4)では、第1a層下直ちに第4層が堆積していた。I区M14a 4以北において第3層が第1a層下に表れ、北にいくに従い厚みを増し、その下に第4層が位置するようになる。第1a層と第3層、第4層との層界は、何れも「画然」とし形状は「平坦」である。南側に第3層がみられないのは、長年の耕作により削平され、消滅したものと思われる。この付近に全く第3層が形成されなかつたとは考えにくい。I・IV区の地形は南側と東側に緩く上の傾斜をしているが、原地形の傾斜は現在より若干強かったのではないかと考えられる。

註 <sup>※6</sup> 「 」内の層界表現については例言9を参照



第2図 III区造構の分布 (1/600) と遺物の層序 (1/60)



第3図 I・IV区造構の分布 (1/600) と遺物の層序 (1/60)

# 第V章 遺構と遺物

## 第1節 遺構

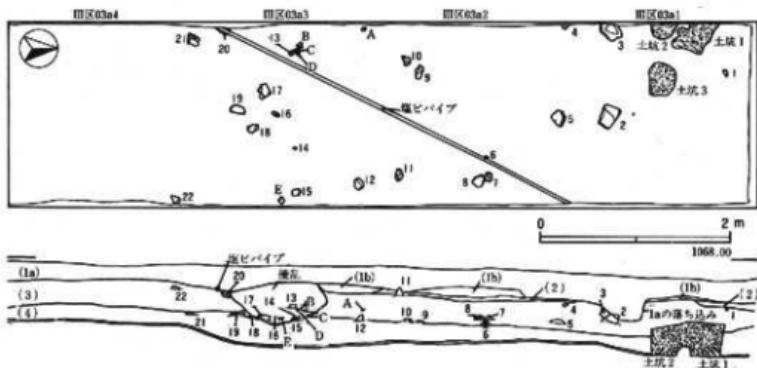
### 1. III区

#### (1) 集石 (第4図 図版2-2)

III区O3a 1・2・3・4の地表面下約50~60cmの深さ、第3層下部~第4層上面のはば同レベルから複数の礫が出土した。同グリッドから出土した礫に番号を付し、平面図と西壁セクション図に投影したものが第4図である。同土層面、同レベルから出土したのは、2・5・6・7・8・9・10・12・14・15・16・17・18・19・21の番号の礫である。番号14・16の礫は発掘中に崩れてしまつたため、セクション図上では点で示し、図版には写っていない。伴出した土器はEで縄文中期初頭のものと思われる。番号13の礫はこの集石より若干上部に位置するが、縄文中期初頭のものと思われる土器(B・C)を伴っている。Cの上に被さる様に出土したDは縄文中期中葉のものと思われる。これら番号13の一群と同レベルにて出土しているAの土器も縄文中期初頭のものと思われる。他の礫はこれらより上部から出土している。1は打製石斧である。

#### (2) 土坑 (第4図 図版3-1)

III区O3a 1に柱穴状の遺構が3基みられた。西側壁面に2基、そのすぐ東側脇に1基ある。北側から土坑1・2・3とする。土坑1・2の覆土より各1点の黒曜石片が出土している。掘り込み面ははっきりしないが、第3層下部であると思われる。覆土は黒褐色(10YR2/3)を呈し、2~10mm程度のロームブロックと炭化物を含む。締まり、粘度ともに第3層と同じである。

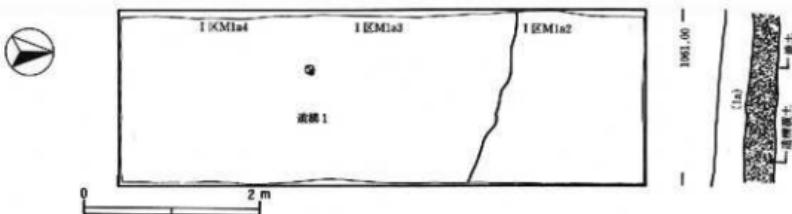


第4図 集石・土坑 (1/60)

## 2. I・IV区

### (1) 遺構1 (第5図 図版3-2)

IV区M1a2・3・4より検出された住居址と思われる遺構である。遺構を検出した層は第4層上面であるが、地形の章で記述した様に、こここのグリッドでは第1a層直下に第4層が面している。同様に覆土も第1a層下に面しており、その層界から覆土が削られている可能性が高く、掘込み面は不明である。IV区M1a4は住居址内に完全にあたっていたために、遺構覆土の認知が遅れ、覆土を必要以上に振り下げてしまった。その結果多数の土器片を取り上げている。覆土より出土した土器は縄文時代中期中葉のものである。住居址覆土の土色は第3層と同じ黒褐色土(10YR2/3)であり、径2~10mm程度のロームブロックと炭化物を均一に含んでいる。IV区M1a4南側壁面下部中央には幅15、6cmの焼土ブロックが露出し、その周辺には焼土粒子が観察される。



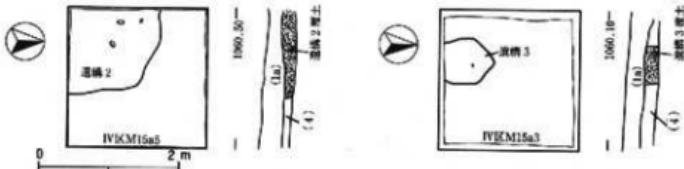
第5図 遺構1 (1/80)

### (2) 遺構2 (第6図 図版4-1)

I区M15a5より検出された住居址と思われる遺構である。遺構を検出した層は遺構1と同じく、第1a層直下に面する第4層上面である。覆土より縄文時代中期中葉の土器が出土しているが、本遺構に帰属するものかどうかは明確でない。覆土は遺構1と同様に土色は第3層と同じ黒褐色土(10YR2/3)であり、径2~10mm程度のロームブロックと炭化物を均一に含んでいる。

### (3) 遺構3 (第6図 図版4-2)

I区M15a3より検出された土坑と思われる遺構である。遺構を検出した層は遺構1・2と同じく第1a層直下に面する第4層上面である。覆土より縄文時代中期初頭の土器が出土しているが、本遺構に帰属するものかどうかは明確でない。覆土は遺構1と2と同様に土色は第3層と同じ黒褐色土(10YR2/3)であり、径2~10mm程度のロームブロックと炭化物を均一に含んでいる。



第6図 遺構2・遺構3 (1/80)

## 第2節 遺 物

### 1. 遺構に伴う土器（第7図）

(1) 集石周辺の土器 第7図1～4は、集石を検出したIII区O3a1・2・3・4から出土した第4図A・B・C・D・Eの土器である。BとCは接合している。1がA、2の上部がBで下部がC、3がD、4がEの土器である。1・2・3は集石遺構より若干上部から出土している。1・2の土器は縄文中期初頭のもの、3の土器は縄文中期中葉のものと思われる。4は集石と同レベルから出土した土器である。時期は縄文中期初頭のものと思われる。同グリッドからは1・2・3・4の上部より多数の土器が出土している。それらのほとんどは第3層からの出土である。内容は、中期初頭から後葉までのものであるが、中期後葉のものが主体を占める。

(2) 遺構1 覆土出土の土器 第7図5～18は、遺構1の覆土より出土した土器である。遺構1の覆土からは多数の土器片を取り上げている。それらの土器の時期は縄文中期中葉のものである。

(3) 遺構2 覆土出土の土器 遺構2の覆土からは2点の土器が出土している。第7図19、20がそれである。土器の時期は2点とも縄文中期中葉のものである。

(4) 遺構3 覆土出土の土器 遺構3の覆土からは1点の土器が出土している。第7図21がそれである。土器の時期は縄文中期初頭のものと思われる。

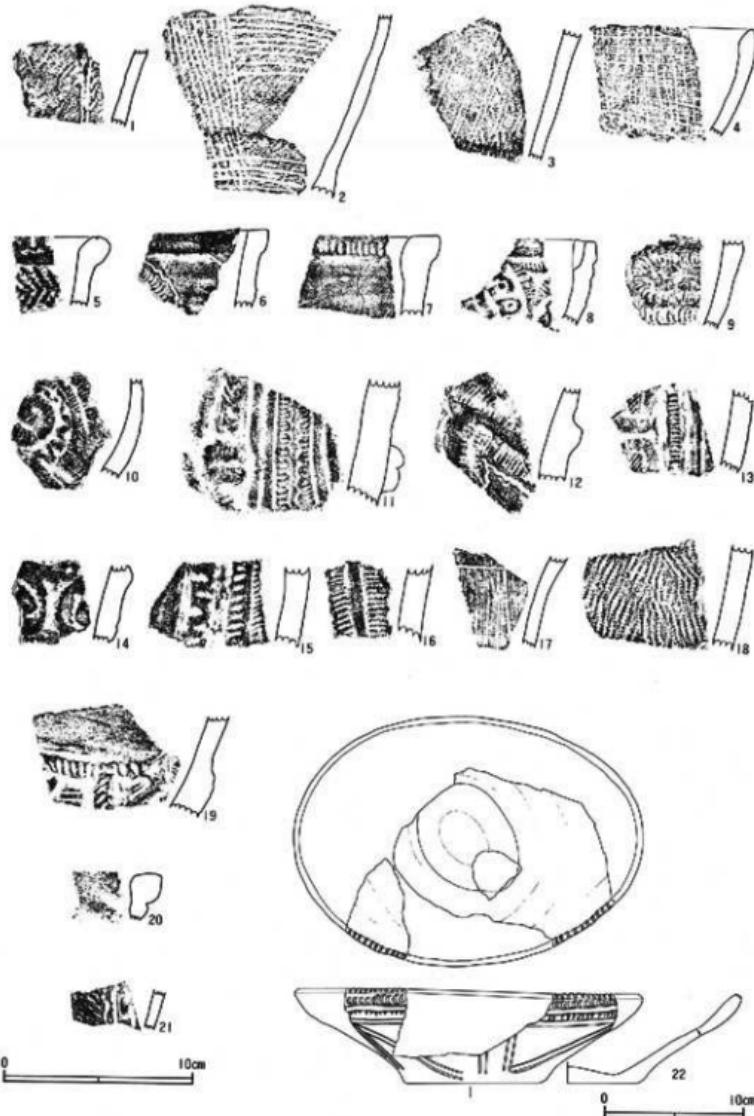
### 2. 遺構外出土の土器

(1) III区の土器 第7図22はIII区P3b5の第3層下部より出土した縄文中期初頭の浅鉢である。今回の調査で唯一復元できたものである。器形は2箇所の口縁部から推定し、上面楕円形を呈している。その他のIII区調査地点の遺構外出土の土器は、ほとんどが第3層中の出土である。出土量は東に向かって漸減している。内容は、縄文中期初頭から後葉までのものであるが、中期後葉のものが主体を占める。図示は行っていない。

(2) I・IV区の土器 I・IV区調査地点では遺構外から多くの土器片が出土しているが、そのほとんどは表土第1a層の出土である。第1a層より下層からは数片しか出土していない。内容は、縄文中期初頭から後葉までのものであるが、中期中葉のものが主体を占める。図示は行っていない。

### 3. 石 器（図版5）

今回の調査では打製石斧15点、磨製石斧3点、石錐14点、ピエス・エスキーエ11点、スクレイバー2点、石錐1点、凹石2点、剥片石器5点、剥片が出土している。図版5-1に打製石斧(①～⑯)と磨製石斧(⑰～⑲)を、図版5-2に石錐(①～⑯)、ピエス・エスキーエ(⑰～⑲)、スクレイバー(⑳㉑)、石錐(㉒)を示した。遺物の出土グリッドは図版中に示してある。集石遺構の確認されたIII区O3a1・2・3・4から出土した石器は図版5-1①の打製石斧(第4図の1)、図版5-2①～⑦の石錐、⑮～⑲のピエス・エスキーエ、㉒の石錐である。遺構1の覆土から出土した石器は、図版5-1⑯の打製石斧、図版5-2⑯の石錐、㉓～㉔のピエス・エスキーエ、凹石1点である。遺構2・3の覆土からは石器の出土はない。



第7図 出土土器 (1/3, 22は1/4)

尖石遺跡出土遺物数量表

区	調査区 ・遺構	土器	石斧	横刃	磨斧	石錐	門石	剥片	石錐	石錐	スクレ イバー ・エス キース	ビエス ・エス キース	剥片 石錐	剥片 (ob)	原石 (ob)	その他
III	O 2 a 4	20										1		1		
III	O 3 a 1 土坑 1	67	1											11		
III	土坑 2													1		
III	土坑 3													1		
III	O 3 a 2	84							2					5		
III	O 3 a 3	126						2	2					28		
III	O 3 a 4	92							3	1		2	1	14		
III	O 3 a 5	35												1		
III	O 3 c 1	40												5		
III	O 3 c 5	21							1					3		
III	O 3 e 1	35												4		
III	O 3 e 5	4														
III	P 2 a 5	14												2		
III	P 3 a 2	29												2		
III	P 3 a 4	6					1						5		四右は石面を転用	
III	P 3 b 1	19	1					1								
III	P 3 b 5	14											4	3	洗鉢出土	
III	P 3 d 1	8												2		
III	P 3 d 5	4														
III	Q 3 a 5	4														
III	Q 3 c 5	3														
III	Q 3 c 5															
	小計	625	2	0	0	0	1	3	8	1	0	3	1	89	3	
I	M13a 1	127				2			1				1	1	6	
I	M13a 3	134							2	2					14	2
I	M13a 5	225	2											1	1	
I	M14a 2	265	1						1		1				2	
I	M14a 4	188	2								1	1			10	
I	M15a 1	145	1		1				1			1			10	
I	M15a 3 遺構 3	72	2						1			1			15	
I	M15a 5 遺構 2	74	3						1	1		1		18	2	
IV	M1 a 2	18													15	
IV	M1 a 3 遺構 1	8											2	1	1	
IV	M1 a 4 遺構 1	72												20		
IV	M1 a 4 遺構 1	80	1						1			1		19		
IV	M1 a 4 遺構 1	130	1						1			1		17	1	
	小計	1541	13	0	3	0	1	5	6	0	2	8	4	148	6	
	合計	2166	15	0	3	0	2	8	14	1	2	11	5	237	9	

## 第VI章 ま と め

今年度の調査は、遺跡の東端を見極めること(III区調査区)、また集落の広場の可能性が考えられる地域(I・IV区調査区)の遺構の分布状態及び地形を調査することを目的として行った。

今回の調査所見をIII区より述べる。今回のIII区調査地点の西側は第II章歴史的環境で述べた様に多数の遺構が発掘され、かつその他にも多数の遺構の推定されていた場所である。しかし、今回の調査では、III区調査地点の最も西側であるIII区O3a1・2・3・4から集石と土坑が検出されたが、それより東側からは遺構は検出されなかった。III区O3a1・2・3・4からは多数の土器片も出土しているが、それより東側のグリッドでは遺物の出土量は徐々に減少する。III区Q3グリッドからは数個の土器片が出るだけで、最も東のIII区Q3e5からは何も出土していない。それらのことから今回のIII区調査地点は尖石遺跡集落の東側境界付近ではないかと推定される。

昭和16年の調査では今回のIII区調査地点の西側に10本のトレンチが東西に発掘されている。このトレンチの東側先端が今回の調査地点付近まで及んでいることはほぼ確実である。昭和16年調査の際にはトレンチの東側先端にも住居址の存在が推定されていた。今回の発掘で集石と土坑が検出されたIII区O3a1・2・3・4は、このトレンチ東側先端に最も近い位置にある。III区O3a1・2・3・4の西壁セクションでは、擾乱部と第1a層の落ち込み(第4図参照)が観察された。この2箇所はトレンチの東側先端の痕とも考えられるが、断定する根拠は得られず、トレンチの東側先端に推定された住居址と今回の調査で検出した集石と土坑との関係を明らかにすることはできなかった。昭和16年調査のトレンチで推定された遺構の正確な位置と性格は不明である。今後の課題として、トレンチの痕跡を確認しながら、推定された遺構を確認していくことが残されている。

集石と土坑が検出されたIII区O3a1・2・3・4の西北20m、III区M1・2グリッドには、宮坂英式氏により昭和17年に発掘され『尖石』に「列石群」として報告される遺構がある。これは「等大」で「土台大の自然石の大塊二三個が、ほぼ等間隔をもって、長さ一〇米に亘って飛石のように一列に並べてあった」ものであり、その中には「赤く焼けているもの」もあった。出土位置は「現地表下三〇厘米の深さ」である。そして列石群の2・3につきその地下を発掘し、「竪穴が存在していた」ことを報告している。今回の集石は地表面下約50~60cmの深さで、第3層下部~第4層上面より出土している。また礫のサイズもまちまちで、焼けた痕跡もなく、地下に竪穴は認められなかった。集石の時期は中期初頭と考えてよいと思われる。「列石群」の帰属が明らかでないとしても、これらのことから「列石群」と今回発掘した集石とは性格上の関連性を見出せない。

今回の調査で集石と共に出土した土器片および単独出土の浅鉢等は中期初頭のものであった。集石と同グリッドから検出された3基の土坑の時期は確定できないが、その掘込み面は集石の位

置していた層面に近いと思われ、集石と同時期の可能性がある。III区の発掘グリッド周辺で既に発掘調査されている住居址は、ほとんどが中期後半のものであるが、今回の調査では、この区域での中期後半の集落の形成以前の遺物と遺構とをみることができた。その点において、今回の発見は尖石集落形成の問題を考える上での一つの成果であったと考えたい。

次にI・IV区であるが、調査地点の南側で3基の遺構が確認された。遺構3を検出したI区M15a3より北では遺構は検出されなかった。遺物はかなり多量に出土しているものの、そのほとんどは表土第1a層内の出土であり、これより下層からの出土はわずかでしかない。I・IV区の調査地点は集落の広場の可能性もあると考えられているが、平成2年度の調査でもその性格が十分捉えられなかつた場所である。今回の調査でも北側に遺構は確認されなかつたが、包含層のみの調査であり、この地域を広場とみるにはなお史料的に不確かであり、今後の継続的調査に期待しなくてはならない。

I・IV区では南半部のグリッドで第1a層直下に第4層が位置し、I区M14a4以北で第3層が第1a層下に表れ、北にいくに従い徐々に厚みを増していき、その下に第4層が堆積していた。第IV章第2節の各区の層序と地形では、I・IV区の南半部にも以前は第3層が存在したのではないかとの所見を述べた。南半部で第1a層下に面して検出された3基の遺構の覆土がいずれも第3層と類似していたことからも、縄文時代には第3層が存在していたことが推測でき、原地形は現在より強い傾斜をなしていたと予想できる。

遺構1が検出されたIV区M1a2・3・4の南1mには「尖石」で「III」の番号が付せられた炉址が位置し、本遺構に付随するものであることが予想される。しかし、本遺構に隣接するはずの番号「II」の炉址及び住居址は検出されていない。この様に遺構の検出状況は昭和5年発掘の炉址分布状況と明確に一致するものではなかった。この原因としては、昭和5年の発掘地点が見取図で示されていること、また当時と現在の地番が道路敷設工事によってずれが生じていること等が考えられる。また、番号「II」「III」を炉址として確定してよいかという問題もある。「尖石」に載る昭和5年発掘地点図では炉址として示されているが、本文の記述には炉址としてではなく、共に土器が出土した地点として報告されている。いずれにしても今回のIV区調査地点付近が遺構の濃密に分布する地域であることに変わりはないが、遺構の位置や性格ははっきりしない状態であり、この点を明確にすることも今後の課題の一つである。

最後に、尖石遺跡では今回のI・IV区調査地点のように表土直下に遺構が面している場所がある。土層の状況からみても、特に南作場道に沿う尾根筋は遺構までの土層が比較的薄いとみられる。このため、遺構の分布調査に際しては、今回の遺構1の検出状況のように、必要以上の掘下げには十分注意しなくてはならない点を記して結びとする。



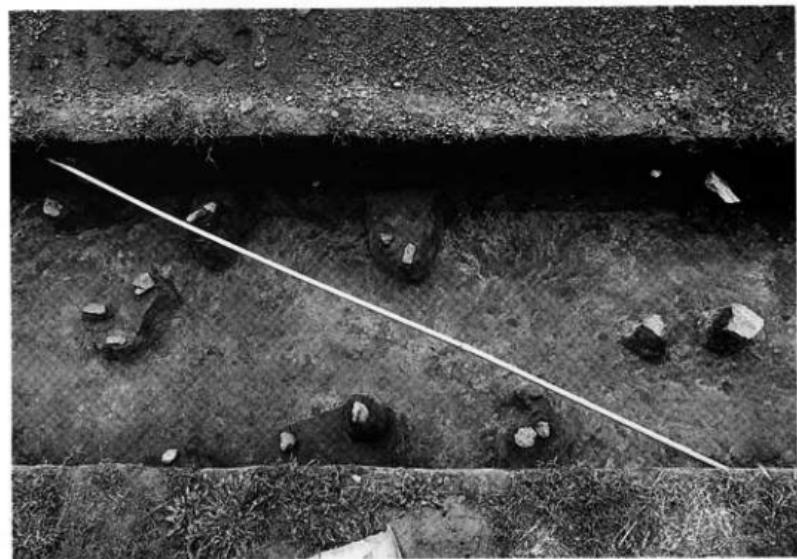
1 III区発掘グリッド



2 I・IV区発掘グリッド



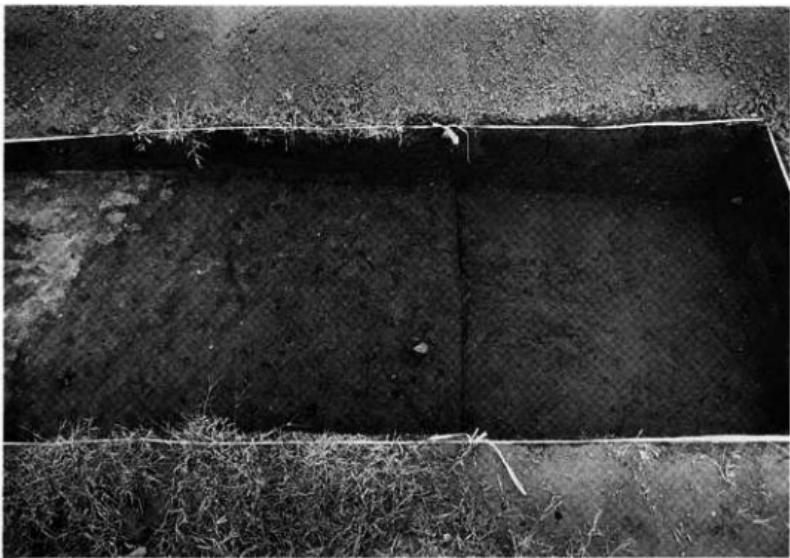
1 基本層序 (III区P3b5グリッド東壁、手前は浅鉢)



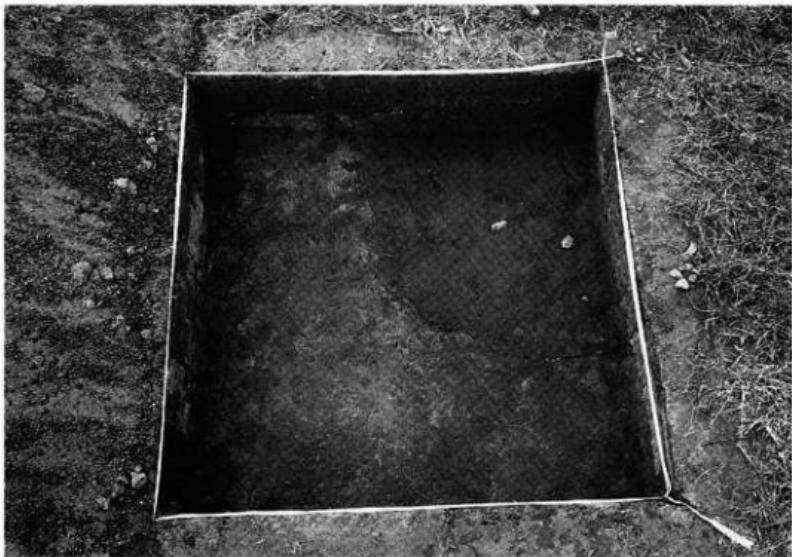
2 集 石



1 土坑1・2・3



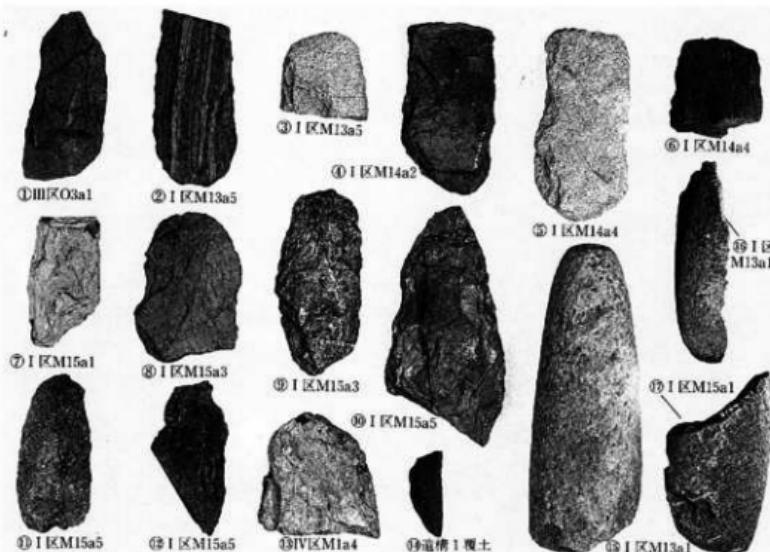
2 遺構1(西から)



1 遺構 2 (北から)



2 遺構 3 (北から)



1 出土石器 (約1/3)



2 出土石器 (約1/2)

---

---

## 尖石遺跡

保存整備事業に係る  
試掘調査報告書

---

平成5年3月20日 印刷  
平成5年3月24日 発行

編集発行 長野県茅野市塚原2丁目6番地1号  
茅野市教育委員会

印刷 はおづき書籍株式会社

---

---

